

## 幼児をもつ保護者の放射線不安を軽減するための児童家庭福祉的支援の試み ー被災地の幼稚園にペットボトルの飲料水を届けるボランティア活動を通してー

八尋 茂樹\*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2014年11月19日受理)

2011年の東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故は、福島県を中心とした住民に放射線に対する大きな健康不安を与えた。特に「水などの飲み物」への不安は深刻である。ボランティアチーム30t projectは、その不安を少しでも解消する目的から、ペットボトルの飲料水を福島県内の幼稚園に定期的に届ける活動をしている。そこで本研究では、同団体が水を届けている施設の保育者や保護者グループを対象としたフォーカスグループインタビューを試み、この活動の成果と意義について調査した。その結果、ほとんどの保育者や保護者が、震災から3年以上経過しても放射能による水道水の安全性に不安や不信感を抱いており、同団体の活動によってその健康不安が軽減され、児童家庭福祉的支援としての成果が得られていることがわかった。一方で、この活動によって、福島県の水道水が安全ではないという風評被害や、水道水よりもペットボトルの水の方が安全であるという固定観念を強化してしまうおそれがあるため、改善していくべき課題も明らかになった。

(キーワード) 幼児, 保護者, 放射線不安の軽減, 児童家庭福祉, ペットボトル飲料水

### I. 研究の目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故は、福島県を中心とした住民に、放射線に対する大きな健康不安を与えた。また、放射性物質の飛散・拡散についての情報開示の遅れ、内部被曝の線量の基準値における子ども基準の配慮が遅れた政治的判断への不信感が、福島県民が抱く健康不安の助長につながったと指摘されている(境野, 2013)。福島大学・子どもの心のストレスアセスメントチーム(2013)の調査では、特に福島県内で生活する子ども(乳幼児から小学生まで)の保護者の放射能に対する不安は他県と比較して非常に高く、さらに「水などの飲み物」への不安は震災直後から深刻な状況が続いているという。

このような状況下において、山形県のボランティアチーム「30t project」は、2012年3月11日の設立以降、被災した福島県Y市Z地区の幼稚園(計5施設)に、全国からの寄付で集められたペットボトルの飲料水(1施設あたり1回の訪問につき600リットルから800リットル)を定期的に届ける活動をおこなっている。福島県Y市の水道水の放射線量モニタリング検査では、震災直後をのぞき、セシウム134および137やヨウ素131および132は不検出とされている<sup>1)</sup>。しかし、特に小さな子どもを持つ親を

中心に「安全かもしれないが、必ずしも安心はできない」というストレスを抱えていることを知り、その不安を少しでも解消する目的から活動を継続している。また、同団体は時間の経過とともに風化しがちである福島県の被災の現状を全国に向けて発信し続けることも活動目的としている。

本研究では、同団体が水を届けている幼稚園の教諭(以下、保育者)および保護者から、この活動に関する意見を聞き取ることで、この活動の成果や意義、そして課題について整理し、放射線災害における乳幼児を持つ親が抱く健康不安への福祉的支援のあり方について考察する。

### II. 研究方法

#### 1. 調査対象

本研究では、30t projectが活動の対象としている福島県Y市Z地区の幼稚園(公立・私立あわせて計5施設)に通園する3~6歳児の保護者15名(全て母親)、保育者5名に調査協力を依頼した。

#### 2. 調査方法

30t projectに同行しての園内での教員や職員への調査、

\*連絡先: 八尋茂樹 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

あるいは、ボランティアに協力してくれる保護者グループとの面接調査（いずれも参与観察と合わせてのフォーカスグループインタビュー）であり、自由な発言の収集を試みた。このインタビュー調査は、発言内容が研究のデータとして取り扱われることを了承した保護者のみに実施した。また、答えにくい話題や質問には答えなくても良いということ、プライバシーは保護されることをインタビュー前に説明した。

### 3. 調査期間

参与観察調査：2012年4月から2014年9月。

インタビュー調査：2013年9月から2014年9月。

## III. 結果

インタビューの結果、子どもが飲食を通しての放射能による健康被害を受けるのではないかと不安を抱えている保護者が多かった。ほとんどの保護者が放射能による水道水の安全性に不安や不信感を抱いていた。そのため、日頃は水道水を飲料水としている家庭も含め、インタビューに応じた保護者全員がペットボトルの水の方がより安心して飲めると考えていた。また、30t projectの活動によって、そのような不安が軽減されているので、活動が継続されることを願っていた。

また、保育者は、ペットボトルの水が届けられることにより、飲料水に対する安心感が施設と子どもたちの各家庭の両方で得られている点を指摘していた。さらに、震災から3年以上経過し、風化によって支援が滞ってきた状況下において、30t projectから継続的に支援を受けられることが、安心して飲める水を届けてもらっているだけでなく、「自分たちは忘れられていない」という喜びと元気をもらっているとの発言があった。そして、幼稚園の関係者以外の大人が子どもの成長を見守っていることの素晴らしさも指摘された。

#### 1. 活動に対する保護者の具体的感想

・飲食に関しては親よりも成長期にある子どもたちに被害がないか不安。自宅の料理には気を配ることができるけれども、幼稚園でも気を遣ってもらっていると思うと安心できる。

いただけるものは、水が一番うれしいし、とても助かる。

・飲食は生活の基本であるし、放射能のことがよくわからないだけに、このように（ペットボトルの）水をいただけるのはとても安心して生活が送れる。

・Y市の水（水道水）は安全だということは聞いているけれども、本当に信用して良いのか感覚的に不安になる。ペットボトルの水を飲みたいけれども、経済的に難しいので浄水器を通して飲んでいる。いつも子どもが園で（ペ

ットボトルの）お水をいただくので、とても助かっている。

・震災直後に政治の対応も混乱したので、食べ物や水（水道水）が安全であると言われても不信感がある。素人なのでどう対応して良いのかわからず、とりあえず浄水器の水を飲んでいる。本当はしばらくの間はミネラルウォーターを子どもに飲ませたい。

・放射能は目に見えないし、匂いもない。得体のしれないものなので、子どもたちにどのような害をもたらしているかととても不安である。口に入れる食べ物や水は、できれば他県のものを買いいたいいつも思っている。これからも（ペットボトルの）お水を届けていただけたらうれしい。

・放射性物質の影響が、自分たちや子どもたちにいつ出てきて、いつ健康を崩すのか、それとも崩さないのか、全くわからないからこそ不安である。洗濯やお風呂、トイレの水は水道水を使うけれども、飲料水はペットボトルの水をスーパーで買ってきているので、子どもがもらってくる時は助かっている。水は子どもが直接体の中に取り込むものだから、少しでも安心したものにしたい。

・子どもは大人よりも放射能の影響を受けやすいと聞いているので、いただけてくる（ペットボトルの）お水はとても助かる。園でもらえると、子どもがすぐに（自宅の）冷蔵庫に入れて、喉が渇くと自分でペットボトルを出して飲んでいる。いつもはお店でペットボトルを買うけど、それは安心を買っていると思っている。だから、（ペットボトルの）お水をいただける日は、安心をいただいた日だと思っている。

・子どもはなぜ水をいただいたのかわかっていないけど、園からペットボトルを受け取る時に、また来てくださったんだなとうれしく思っている。まだまだ安心して水（水道水）を飲める状況ではないと思っているので、こんなに長く続けてもらっていて本当に感謝している。

・震災直後は水だけでなく色々な物資をいただけていたけれども、（震災から）3年経過して日本では私たちの不安は忘れ去られてきたと思う。そんななか、ずっと水を届けに来てくださっていることが本当にうれしく思う。親も子どもの健康について無関心にならないよう気をつけなければならないと思う。

・本当は安心して子どもを育てられる地域に引っ越すことも考えた。しかし、自分が生まれ育った町が好きだし、子どもにもこの町を好きになってほしい。本当は水道水を安心して飲めるような時代に早くなってほしい。（ペットボトルの）お水をいただけることで、私たち家族の思いを応援していただいていると感じている。

・園に子どもを迎えに行ったときに活動されている場面をちょうど見て、本当にありがたいなあと思った。これからも続けてほしいと思う。

・最近水や食べ物が汚染されているかもしれないというのを忘れて生活を送っているときがある。それは少しずつ日常が取り戻しているのかもしれないけど、子どもが幼稚園で水をいただける時にあらためて放射能について考えるきっかけにもなり、とても大切な機会をもらっていると思う。これからもよろしくお願いします。

・Y市の水は安全なので心配していない。でも、ミネラルウォーターをいただけることはとてもうれしいし、水道水より安心して飲めるので、今後も続けていただきたい。

・（水道水を）あまり不安には思っていない。でも、ペットボトル（の水）がいただけるなら、より安心して子どもに飲ませることができるので、これからもいただきたいと思う。

・自宅ではあまり気にせずに水道水をそのまま飲んでいる。ただ、ミネラルウォーターは美味しいし安全なイメージがあるので、いただけるのであればとてもうれしい。

## 2. 活動に対する保育者の具体的感想

・園庭に放射線量計がある光景は普通な状況ではない。このような状況の中で子どもを育てていくのはとても大変である。（ペットボトルの）お水を子どもたちに飲ませることができ、私たち大人が抱えている不安を少なくしてもらっていると思っている。子どもたち（親）には家に数本ずつ持って行ってもらっているの、家でも安心して飲んでもらえて助かっている。特に今は運動会の時期なので、普段より水を飲む量も多く、安心して子どもに与えられて助かっている。

・園で水道水を飲んでいない子どももいるので、ペットボトルのお水をいただいて本当に助かっている。園内だけでなく、家庭にも3本ずつくらい持ち帰ってもらっているの、家庭でも安心してもらえるし、実際に親から大変喜ばれている。

・1箇所除染したところで、違う場所の除染が済んでいないのでずっと不安が続いている。これは幼稚園でも家庭でも同じで、そういう思いが強いから、いただいているペットボトルは本当にありがたいと思っている。

・だんだんと支援してくれる団体がなくなってきたなか、いつも継続して水をいただけるたびに、「私たちは忘れられていない」と感じ、元気がでくる。これからもお水と笑顔を届けにきてほしい。

・子どもたちはお水のおにいさん、おねえさんが来てくれるのを楽しみにしている。水を届けてくれるだけでなく、子どもたちが心からはしゃいで遊べる時間を作っていただけて感謝している。園の関係者以外の大人が子どもたちの成長を何年も見守っていただけていることがとても素晴らしいと思う。

## IV. 考察および課題

### 1. 活動の児童家庭福祉的效果

本研究の調査の舞台となった福島県Y市Z地区は福島第一原子力発電所から30km圏内の緊急時避難準備区域に指定されていた。2011年9月30日に解除されたものの、Y市民の不安・心配は、圧倒的に「放射能による人体の影響」に集中している（Y市市民意識調査、2013）。2014年現在、Y市Z地区の幼稚園の園児数は、震災前と比較して半減した状態である。

冒頭で述べた通り、福島県Y市の水道水の放射線量モニタリング検査では、震災直後をのぞき、セシウム137やヨウ素131は不検出とされており、公表されている調査結果からすれば、Y市は十分な安全な水道水（飲料水）が供給されていることになる。しかし、本研究での聞き取りでも明らかになった通り、水道水に対して保護者や保育者が抱えている安全性への不信感は根強く、ストレスの要因となっていた。七木田（2014）は、「福島母親は、見えない放射能によって、いつわが子に健康被害が生じるかわからないという漠然と長期にわたった不安を抱えており、このような状態での子育ては、親子の愛情形成において好ましくない」と指摘する。

30t projectの活動は、このような「漠然と長期にわたる不安」を軽減させることを主目的としており、調査の結果、その目的は果たされていることがわかった。また、特に保育者の側から「風化しつつある現状で、支援を継続していることのありがたさ」や、定期的に幼稚園に支援に行くことによって「保護者や保育者といった関係者以外の大人が、子どもの成長を見守り続けていることの素晴らしさ」という感想も重要である。同団体は水を届ける際に、園児たちや保育者たちとの交流を必ずおこなってきた。訪問の度に相撲をとり、子どもの押す力が強くなっていることを実感したり、津波の恐怖から、強風で大きな音がすると号泣していた子どもが、大きなザリガニをつかめるまでに成長した姿を見届けたりしていることが保育者たちから報告された。安心して飲める水を届け、子どもたちを育てている大人の不安を軽減しているだけでなく、様々な心理的援助にもあたっているのである。全ての保護者と保育者が、これから先も継続してペットボトルの水を届けてほしいと願うのは、同団体のこの活動が児童家庭福祉的支援の意義を持ち合わせており、この2年半で一定の効果が表れていることを示している。つまり、行政はもちろんのこと、民間の支援団体の手の届きにくい「保護者や保育者への精神心理的ケア」をペットボトルの飲料水を提供する過程にておこなっていると言える。

## 2. 活動の今後の課題

一方で、同団体はこの活動の課題を自ら指摘している。ひとつは、同団体の活動とその効果が徐々に世間に認知され、知名度があがることにより、ペットボトルの水を提供し続けることが、「Y市の水道水が安全ではないからではないか」という憶測(風評被害)を広範囲で招く恐れがあるということである。さらには、「水道水よりもペットボトルの水の方が安全である」という固定観念をさらに強める可能性もある<sup>2)</sup>。むしろ、理論上は水道水の方がペットボトル飲料水よりも水質基準は厳しく、安全であるという報告もある(難波, 2011)。国民が、一般的には日本の水道水は非常に安全であることを広く認識し、同団体の活動は、福島県の母子が抱える「放射線に対する健康不安」を少しでも軽減するために、「水道水の安全面」よりも「ペットボトルの水から得られる安心面」を優先したレアケースであることを認識するために、日本の水文化に対する啓蒙活動を展開することも非常に大切である。また、直ぐに取り組めることとしては、明確に安全性が確認されているミネラルウォーターのみを届ける努力が挙げられよう。これらの課題を乗り越えることによって、今以上に保護者や保育者に安心感を提供できれば、同団体の活動意義はより一層高まる。

本研究の今後の展望としては、同団体の活動による保護者・保育者への児童家庭福祉的支援の成果を継続的に調査することにより、子育てにおける親子の愛情形成にいかなる影響を与えているかの考察に結びつけていきたい。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、活動への同行および調査を許可していただいた30t projectの須貝賢代表に深く感謝いたします。また、インタビューに快く応じていただきました福島県Y市Z地区の幼稚園の先生方、保護者の皆様方に感謝の意を表します。

## 文献

- 境野健児：放射能汚染への父母の不安と学校の受容，日本教育学会大会研究発表要項，72, 234-235, 日本教育学会，2013.
- 七木田方美：他者を意識したボディワークによる言葉の構築：東日本大震災において放射能不安のある福島県母親らの心の回復をめざして，比治山大学短期大学部紀要，49, 85-102, 2014.
- 難波正義：水道水及びボトル水の水質を培養ヒト肝細胞の生存率を指標にして検討，新見公立大学紀要，32, 51-53, 2011.
- 福島大学・子どもの心のストレスアセスメントチーム，福島県における親と子のストレス調査結果報告（第三回調査），2013.

## 注

- 1) 南相馬市水道課の飲料水(水道水)モニタリング結果では，セシウム134および137とヨウ素132は，震災後も一度も検出されていない。また，唯一検出されたヨウ素131も2011年4月3日を最後に検出されなくなっている。
- 2) 水道水は水道法で50項目，ペットボトルの飲料水は食品衛生法で原水に18項目の水質基準が定められているように，理論上は水道水の方が水質基準は厳しく，安全性が高いと考えられる。ただし，受水タンク(貯水槽)を経由した水道水は必ずしも安全性が確保されていない。